J.-J. ルソーの「環境思想」を探る

J.-J. Rousseau, As an Ecologist

荒　井　宏　祐

Hirosuke Arai

はじめに：小稿の目的

レヴィ＝ストロース（Levi-Strauss, C, 1908～）は1962年のルソー（Rousseau, J.-J. 1712～1778）生誕250年記念祭における講演で、「文学、詩、哲学、歴史学、道徳、政治学、教育学、言語学、音楽、植物学その他もろもろの分野」がルソーの才能に負っているが、さらにルソーは「人類学を創始した」。「彼の語調の一つ一つ、彼の人格、彼の存在そのものによって、人類学者に兄弟としてのはげましを与える」。「人類学者はルソーのイメージの中に自分自身の姿を見出し、そのイメージによってよりよく自己を理解する」と述べた[(1)]。

ルソーの膨大な著作の中には、人類学のほかにも、すでに『人間不平等起源論』（以下『不平等論』）の、岩波文庫版邦訳者が、その訳注や訳者解説（平岡昇、1972年）で簡単ではあるが注記を忘れなかったように、今日「環境思想」として一括できそうな一連の言説を見出すことができる。また後述のように、環境倫理学者や環境経済学者が、自説の主張に際しルソーを想起している例が見られる。

この小稿では、こうした言説についてささやかな整理を試み、ルソー思想の多様性の中に、「環境思想家」としての一面を探ることにしたい。そしてこの作業を通じて、ルソーの「自然」理解の一つとしての「自然環境」の把握が、今日我々が言うところの「環境」としての「自然」理解に及ぼうとしていたこと、またそれによって、18世紀フランス啓蒙思想が「環境思想」を含みつつあったことを示唆してみたい。

なお、一口に「環境思想」といっても、その内容は現在多岐に及んでいる。ここではとりあえず、ルソー思想の中に見られる、自然破壊と人間の諸活動の関係や都市化等と健康問題との関連の認識（環境問題意識）、生物類と自然環境との生態的関係の認知（生態系としての「自然」認識）、それに自然の生命価値・内在価値の重視（「自然」の環境倫理的理解）などについて注目してみる[(2)]。

〔Ⅰ〕 ルソーの「環境問題意識」の諸相

1　人間の諸活動と自然破壊との関連の認識

まずルソーが土地・森林の開拓や技術開発、資源消費の拡大など、人間の諸活動の高まりと自然破壊との間にいかなる関連を認めていたか、彼自身の言葉を例示すると次のようになる。

(1)　開拓・消費の増加と土壌破壊の増大

土壌の破壊、すなわち植物に適した物質の損失は、土地がますます開拓され、いっそう勤勉な住民がますます多量に土地のあらゆる種類の物産を消耗するのに比例して増大するにちがいない…。（本田喜代治・平岡昇訳『不平等論』原注(d), P.140。以下頁数はこの版により、P.140などと記す。他の引用もこの形に準じる。）

(2) 草木の多量消費による砂漠化の危険

もし私の読者のなかに、このような土地の自然的な肥沃さ（引用者注—ルソーは本文で未開社会は「土地は、その自然のままの豊饒さに放置され(d)、いまだかって斧を入れたことのない大森林に蔽われていて……」とした）を仮定する考えについて、私に異議をとなえるようなだれか意地のわるい科学者があるならば、私は、彼に次の一節でもって答えるだろう。……。

「人間は火やその他の用途のために木材や草木を多量に消費するので、その結果として、人の住む地域の植物地層はたえず減少し、ついには中央アラビアやその他非常に多くの近東の地方のように変わってしまわねばならない。この近東は事実、もっとも古くひとの住まった風土なのだが、そこには塩と砂だけしか見出されないのだ。」『博物誌』「地球理論の証拠（第7条）」……（『不平等論』原注(d) P.139）

(3) 森林破壊と開発との関係の認識

この数世紀の間に発見されたほとんどすべての無人島があらゆる種類の多数の草木で蔽われていたということと、また地球が人に住まわれ開発されるに従って地上いたるところで膨大な森林を切り崩さなければならなかったと歴史がわれわれに教えている…。（『不平等論』原注(d) P.139）

(4) 技術と社会的不平等、森林破壊との関連の認識

一人の人間が他の人間の援助を必要とするやいなや…平等は消えうせて、私有が導入され労働が必要となった。そして広大な森林は美しい原野と変わって、その原野を人々の汗でうるおさなければならなかったし、やがてそこには収穫とともに奴隷制と貧困とが芽ばえ、生長するのが見られるようになった。冶金と農業とは、その発明によってこの大きな革命を生みだした一つの技術であった。人間を文明化し、人類を堕落させたものは……鉄と小麦である。（『不平等論』P.96～97）

即ち、(1)では「植物に適した物質の損失」と定義された「土地の破壊」の増大が、住民による土地資源の消費活動の拡大によって進行すること、また(2)は、もともとは引用者注に見る通り、“未開社会の土地が自然のまま豊かであり、大森林におおわれていた”との自説に関する批判に対し、ビュッフォンの博物誌の引用で反駁しようとしたものである。この引用部分はしかし、同時に上記(1)の自説を補強する役割をも有していると見てよかろう。

現在でも途上国における草木の大量消費は、破漠化の一因としてあげられることが多いが、ルソーはすでにそうした関連をビュッフォンから学んでいたといえよう。また、『不平等論』の訳注では、この原注(d)に関して、「このあたりは文明が生命にとって大切な自然の破壊へ導くという近代社会の問題を先取しているようにみえる」としている。また平岡昇は訳者解説で「生態学や公害問題を先取したような」原注の存在に注意を促している。

さらに(3)は、歴史的にも最近数世紀間の発見にかかる無人島が、多種多様の緑に恵まれていたのに、「地球」上における人間の開発活動の進行に伴い、膨大な量の森林が破壊された事実を指摘している。

これら(1)～(3)を通じて、ルソーが土質の劣化、森林破壊、砂漠化の進行と人間の開発・消費活動の拡大との間には、一定の因果関係があることを把握していたことが示唆されよう。これらはすでに今日の我々にとって、基本的な環境問題の一つとして認識されている。

最後に(4)だが、環境破壊の大きな要因の一つである森林破壊と土地私有制の導入、社会的不平

等（奴隷制と貧困）の生長との関連、さらにはこれらと冶金や農業技術の発明との間の密接な関係が指摘されている。

この点については従来のルソー研究でも、「ルソーの眼は……人類文化の発展の表裏にきびしい批判を下していた」とし、とくに技術の発明との関連の指摘について、「ルソーが『不平等論』第二部で、脱自然状態化の諸段階に鋭い分析を加えて、「改善能力」の不吉な働きを描いた部分は、とくに天才的な洞察に光っている。」[(3)]と述べられている。

ルソーがとくに注目する土地の私有制の拡大、貧困の生長と耕作地化による「広大な」森林破壊は、現在途上国の住民が直面する大きな環境問題の一つである。人間の不平等を見すえるルソーの視界には、近代化、工業化を促した「改善能力」の展開と環境破壊との関連も映じていたものと思われる。

なお、ルソーが指摘した、土地私有権と環境破壊との関連について、環境経済学者の宮本憲一は「環境は人間の共同財産です。ところが土地が生産手段として私有化されるとともに土地そのものとそれに付属する表流水、地下資源、地上の森林や空間（大気を含む）は所有あるいは占有する企業や個人の私的利益のために自由に利用されるようになりました。J.-J. ルソーは『人間不平等起源論』の中で、公共空間である土地に縄ばりをして私有権がみとめられた時に、人間の社会的不平等が生まれたといっていますが、同時に土地の私有権がみとめられた時に、人間が自然を搾取して、環境を破壊する自由がみとめられたといってよいのではないでしょうか。」[(4)]と述べている。上記(4)のようなルソーの認識には、こうした現代の環境経済学者の問題意識と通底するものが見て取れよう。レヴィ＝ストロースは冒頭に触れたように、ルソーの「語調の一つ一つが人類学者に兄弟としてのはげましを与える」と述べた。この宮本の語調には、ある先駆的な環境経済学者が、ルソーの中に一人の縁者を見出したとの想いが感じられるのであるまいか。

2　都市化・産業化・文明化と健康問題との関連の把握

ここでは、今日の大きな環境問題の一つである、都市化などと健康問題の発生との関連について、ルソーがどう認識していたか例示してみる[(5)]。

(1)　食品・薬品公害、都市大気汚染による病気など

①　なんらの偏見ももたないで、社会人の状態を未開人のそれと比較してみるがよい。そしてどんなに社会人が、その邪悪さと欲望と悲惨とのほかに、苦痛と死とに向って新しい門を開いたかを、できれば研究してもらいたい。……またもし食物の異常な混合、有害な調味料、腐った食料品、変造された薬剤、それを売る人たちの詐偽行為、それを服用させる人たちの誤り、それを調合する容器の毒……また、集まった多数の人々の間の悪い空気のために発生する伝染病、われわれの生活様式の脆弱さやわれわれが家の内と外とを往き来するために起る病気……やがてわれわれの生命または健康を失うことになるような〔医学的な〕処置などのために起る病気などに、皆さんが注意を向けるならば、…われわれが自然の教訓を軽蔑したことに対して、自然がいかに高い代価をわれわれに支払わせているかが感じられるであろう。（『不平等論』原注(i) P.150～151）

②　生活様式における極端な不平等、ある人々には過度の余暇、他の人々には過度の労働……夜更しその他あらゆる種類の不節制……あらゆる身分で人々が経験し、そのために魂が永遠に蝕まれる無数の悲哀と苦痛。これこそ、われわれの不幸の大部分がわれわれ自身

の仕業であること、従ってわれわれが自然によって命じられた簡素で一様で孤独な生活様式を守っていたとしたら、恐らくはこれらはほとんどすべて避けられただろうことの忌まわしい証拠である。(『不平等論』第一部 P.47)

(2) 都市の空気汚染、不潔

① 都市は人類の堕落の淵だ。…あまりにも多くの人が集まっている場所の不健康な空気のなかで失うことになる生気を、ひろい田園でとりもどさせるがよい。(今野一雄訳『エミール 上』第1編，岩波書店，1990年第60刷，66頁。以下『エミール 上』)

② パリに着いて、どんなに予想を裏切られたことだろう！……市中に入ると、眼に映るものは、汚い臭気にみちた狭い路と黒ずんだ粗末な家、不潔と貧困の雰囲気、乞食、……そんなものばかりだ。(桑原武夫訳『告白 上』岩波書店，1990年第60刷，228頁以下『告白 上』)

(3) 産業化に伴なう、生命・健康破壊、職業病発生の指摘

① 鉱山労働や金属・鉱物、とりわけ鉛・銅・水銀・コバルト・砒素・鶏冠石などのさまざまな調製などのような、寿命を縮めたり、体質を壊したりするあの多数にのぼる不健康な職業を加えてみるとよい。なおその他に、屋根葺きや、大工・左官や石切場で働く人たちなど、多くの労働者に毎日命を失わせている危険な職業をつけ加えてみるとよい。(『不平等論』原注(i) P.154)

② 石切場、坑道、製鉄所、溶鉱炉、鉄砧や大槌が響き煙と火の渦巻く工場が田園の仕事の楽しい光景にかわる。鉱山の毒気に憔悴したみじめな人たちの青ざめた顔、まっ黒な鍛冶屋、醜い一眼の巨人、鉱山経営によって大地の内部に見られるそういう姿が大地の表面における緑の野や花、青い空、恋する牧人や頑健な農夫たちの姿にとってかわる。(今野一雄訳『孤独な散歩者の夢想』第7の散歩，岩波書店，1990年第60刷，117頁。以下『夢想』)

即ち、(1)、(2)ではルソーは文明化された生活や環境で多く見られる現象として、健康に有害な食品や調味料、変造薬品、有毒な容器の使用、それに都市における伝染病などの病気の流行や大気汚染などに伴う健康問題の発生を指摘している。また、過度の余暇と労働が併存しているような「生活様式の不平等」や「あらゆる種類の不節制」などをいわゆる「文明人」の不幸と見て、この原因を人間が本来自然に保つべきライフスタイルを守らないことに求めている。

さらに(3)では、①で鉱山開発や「煙と火の渦巻く工場」労働、鉛・銅・水銀など健康に有害な原料調製の過程からくる職業病の発生や生命・健康の破壊が指摘されている。また、②の牧人や農夫の健康に溢れた姿が鉱山労働者の青ざめた顔にとって代わるという描写は、いわば第1次産業従事者が第2次産業労働者に転換していく変動に、すでに不吉な兆候を感じ、これに鋭い警告を発したと見ることもできよう。

なお、『不平等論』の訳者解説では、(1)〜(3)を指してであろうが「労働問題はもとより、……公害問題を先取したような……諸編、そのなかに今も変わらぬ数々の社会悪、文明悪をいっそう具体的に論じた文章は、現代のわれわれを驚かすほどの新鮮な興味をそなえている。」と述べられている。

以上〔Ⅰ〕では、ルソーが人間の諸活動と自然環境破壊との関連や都市化と生命・健康問題との関係について鋭く洞察し、これに批判を加えている様子などを一見した。これらは、現代の環境問題意識の重要な構成要素となっている。

また、これらについてとくに注目されるのは、ルソーが多義的に用いている「自然」には田園や山岳、水流などの自然環境が含まれているが、この自然環境には、都市の大気、土地、土壌の質、森林などもあること、しかもそれらがこれまで見たように、我々が今日環境問題などという時の「環境」の一つとしての、土地、土質、森林、大気などの意味を荷って登場していることであろう。ルソーの「自然」理解は、今日の我々の「環境」としての「自然」理解に迫りつつあったことが示唆されるのではなかろうか（この点は、さらに〔Ⅲ〕の２で再説する）。

ルソーの『不平等論』等における文明社会批判には、環境破壊批判も含まれていたことに改めて注意したい。

〔Ⅱ〕 ルソーの生態系としての「自然」認識

1　森林の保水作用や、土壌・森林と動植物間の生態的関係の感知

次の引用にみるように、ルソーは前述のビュッフォンから学ぶとともに、自ら「実験」を行うなどして、森林に水分と水蒸気を保存する保水作用があることや、動植物と森林、土壌の間に、エコロジカルな関係があることを知っていたものと思われる。

(1)　「植物はその養分として、土地からよりも空気や水からはるかに多くの物質をひき出すので、腐敗するにあたっては土地からひき出したよりも多くのものを土地に返すことがある。なお、その上に、森は水蒸気をひき止めることによって雨水を決定する。こうして、人が永く触れないで保存するような森林のなかでは、植物のために役立った地層が非常に増大するだろう。ところが動物は土地からひき出すよりも土地に返すほうが少な」い。『博物誌』「地球理論の証拠（第七条）」……（『不平等論』原注(d) P.139）

(2)　動物によってなされる植物質の消耗を埋めあわせるような植物があるとすれば、それはとりわけ森の木であって、その梢や葉が集まり、他の植物よりも多くの水分と水蒸気とをわが物にするのだ。（『不平等論』原注(d) P.140）

(3)　私の第三のそしていっそう重要な指摘は、木々の果実は他の植物が供給しうる以上に豊富な栄養を動物に供給するということであり、これは、私が自分で行なった実験であって、大いさも質も相等しい二つの土地で、一方には栗の木をいっぱいに植え、他方には麦を播いて、その産物を比較してみたのである。（『不平等論』原注(d) P.140）

即ち、(1)はルソー自身の言葉ではなく、前章〔Ⅰ〕、１の(2)の後半と同じくビュッフォンの博物誌からの引用である。これも前と同様「土地の自然的な肥沃さを仮定する」（『不平等論』原注(d) P.138）自説に対する批判反駁の材料であると同時に、(2)で引用した、ルソーの、森林の保水作用やそれと動植物間のエコロジカルな関係についての主張を裏づける資料として使われている。

この(2)は、ルソーの言葉で森林に保水作用があること、またこの保水作用が、ビュッフォンの説からの「推理」に従って、動物による植物質の消耗を埋め合わせていると述べられている。

また(3)では、ルソー自身の「実験」によって、動物への栄養供給における木々の果物と他の植物との生態的な関係を確認したことが「いっそう重要な指摘」と説かれている。

以上〔Ⅱ〕では，ルソーのエコロジカルな認識のいくつかを例示してみた。現代の環境科学では、地球規模の生態系研究が発展しつつある。周知の通りその中でも熱帯雨林などの森林帯が気候や動植物、あるいは土質に与えるエコロジカルな影響についての研究が重視されている。ルソーは、

こうした自然環境が持つ生態系としての意味に関しても限定的、部分的ながら認識していたものと思われよう。

〔Ⅲ〕 「自然」の環境倫理的理解

現代の環境思想における自然環境観とは、もはや経済開発のために破壊されるに任される「自然」ではない。それは人間のみならず、地球上の全生命と共生する自然であり、それ自体が自己保存と自己実現の権利を持つ存在であるとの理解が、「環境倫理」の考え方の一つとしてしだいに広がりつつある。自然環境という意味での「自然」に対するルソーの心情、認識などは、従来の研究でもたびたびとりあげられている。ここではそれらを「環境倫理」の考え方による自然環境観から改めて見直し、ルソーの言説にどのような新しい意味を見出すことができるか検討を加えてみる。

1 自然愛の感情

(1) 自然の中でやすらぐ幸福感

充実した完全無欠な幸福…こうした状態こそわたしがサン・ピエール島において、またはほかの美しい川のほとりや砂漠の上をさらさら流れる細流のかたわらで、孤独な夢想にふけりながらしばしば経験した状態なのである。(『夢想』第5の散歩 P.88)

(2) アイデンティティの修復

牧場、水流、森、人気のない場所、そしてなによりもやすらかな静けさ、すべてそういうもののあいだにみいだされる休息、…それは人々の迫害…憎悪を、軽蔑を、侮辱を…かれらがあたえたあらゆる苦しみを忘れさせる。(『夢想』第7の散歩 P.126)

(3) 自然の豊かさや景観の賛美

自然によって活気づけられ、婚礼の衣装をまとい、水の流れと鳥の歌声に取り巻かれた大地は、自然の三つの領域の諧調によって、生気と興味と魅力にみちた光景を人間のまえに展開する。それはこの世において人間の目と心情が決してあきることのない唯一の光景なのだ。(『夢想』第7の散歩, P.110)

(4) 即物的・実用的な自然利用観からの解放の訴え

では、自然のもっとも心にふれる美しさを、いつもなにかしら身の利益になることとごっちゃにしたりはせずに、感受する人はいないというのか、……あの色彩、あの香り、あの優雅な変化に富んだ形態、それらのものが植物に付与されたのは、一切合切ひっくるめて乳鉢の中ですりつぶされるためにすぎないというのか。ああ、自然を愛することを知ろうではないか。……自然の美しさに讃嘆することを知ろう。自然は私たちの利益のために身を飾ったのではない。(高橋達明訳「植物学断片二」、『ルソー全集』第12巻、白水社、1987年第二刷、141～142頁。)

以上(1)～(3)は、名文が多いことで知られる『夢想』からの引用である。これらの文の持つ意味については、従来のルソー研究でも多く触れられており、例えば(1)のルソーの幸福感と「自然」との関連については、「人間との交わりに自由も幸福も見出せなかったルソー」は、『夢想』で「自然との交わりに幸福を求め」た。「つまりルソーは、自然でもよい友人でもよいが、親しく語り合う相手を求めているのであり、その相手が見つかった時に、彼は幸福だったのである。」など

とされている[6]。

現代の環境思想の中には、ルソーがとくに(4)で述べているように、自然環境に、人間による実用価値を離れた内在的・生命的価値を認めようという考え方がある。例えば、我々が自然林に入った時に感じる一種荘厳な感情などもこのあらわれとして認められることが多い。また、もはや森林などと共生する哲学を失った近代的自我を「存在障害」とみなし、それをどうリハビリテーションするかという問題が提起されている[7]。さらに自己保存、自己実現の権利を生物のみならず、生態系や景観などにも認めようとしている。

本節(1)、(2)に見るように自然と一体化することで幸福感を得、社会的に否定されたアイデンティティを修復（リハビリ）するルソーの姿は、自然体験による自我リハビリテーションの可能性を語るものであろう。さらに(3)では「自然」の豊かさ、景観の「生気」などに宿る生命力の讃美を、また(4)では、実用価値を脱した生命価値の尊重を、それぞれ示唆しているものと思われる。これらは、上記のような現代環境思想の考え方と通い合うものを含むといえるであろう。

なお、ルソーは自然景観のみならず、「わたしは、いつも水を情熱的に愛してきた」（『告白 下』P.231）という通り、水流、それに山岳の魅力も生々と語っているが、ある環境倫理学者は、「西欧での自然保護への関心は……啓蒙思想的価値観に対するロマン主義の反動から大きな影響を受けている。ルソー……は、その意味で自然の価値を認めた先駆者」[8]であると述べている。ルソーの自然愛などの自然環境観が、「環境倫理」の考え方から改めて関心が寄せられていることが知られよう。

またルソーには、単に自然景観などを讃美するだけでなく、次に見るように、自然環境の破壊が弱い立場に不利な形で進行するという、環境破壊の不平等現象をいわば弱者の身になってとらえようとする態度が見られる。

2　ルソーの環境被害の不平等観

ルソーの土地観は、すでに〔Ⅰ〕、1の(4)で見たように、私有制の発生基盤としての土地という制度的な意味と、前章〔Ⅱ〕で見たように、動植物との間にエコロジカルな関係をもつ土壌としての土地という、生態的な意味の二つが区別できる。しかしルソーの土地に対する眼はこの二つを見ているだけでなく、次の引用に見るように、土地の破壊メカニズムそのものにも及んでいる。

この美しい湖は、……そのなかにふたつの小さな島を囲んでいる。そのひとつには人が住み耕地もあって、周囲は約半里。ずっと小さいもうひとつのほうには人も住まず、荒れたままで、大きいほうの島の風波による崩壊を修復するためにたえずそこから土を削って補っていくので、やがては姿を消してしまうことだろう。こんなふうに弱者の身体はいつも強者のために利用される。（『夢想』第5の散歩　P.80）

ここにあらわれたルソーの語調には、風波によるほか人工の力が加わった自然破壊を見る心の痛みが感じられる。その痛みは、大きい島の破壊修復が小さい島の土の犠牲下で行われることでいっそう強くなるばかりか、その状況をルソーの心のもっとも深い痛みともいうべき「弱者の強者による一方的な収奪・支配過程」ととらえることで、ますます大きくなっていく様子が見て取れよう。

ここではルソーの心は、弱者の立場、即ち、たえず削り去られていき、やがて消滅してしまう

であろう、小さな島の土の側に立っている。現代環境思想における「ディープ・エコロジー」の一分派である「スピリチュアル　エコロジー」の姿勢の一つは、「「声なき」生物種に代わって人々の前で事実を語ること」であり、そのエッセンスは、「山の身になって考える」という言葉で示されている[9]。小さな島が土を削られますます小さくなっていく様子を見るルソーは、まさに「小さな島の身になって」語っているようである。

さらに上述の引用句には、もう一つ新しい意味を感じ取ることができる。環境経済学などでは大気汚染などの環境破壊の影響が、子供や老人のような弱者の方に大きくあらわれることなどを「環境被害の不平等分配」と呼ぶことがある[10]。ルソーが、小さな島がその土を大きな島の修復に使われ、「やがて姿を消してしまうだろう」と述べていることには、こうした環境被害の分配構造の不平等性を予兆しているようなトーンが感じられてならない。

また、先進国による途上国の森林資源破壊によって、先進国の住民は木材を得るなどの利益を受けるが、途上国の住民は洪水や山崩れなどの不利益を蒙ることがある。これを環境社会学などでは「受益圏―加害圏と受苦圏―被害圏の成立」としてとらえることがある[11]。引用句では、受苦圏―被害圏（小さな島）と受益圏―加害圏（大きな島）の対比があざやかで、ルソーの眼はこと「不平等」に対しては、とくに鋭く光るようである。

以上の検討をふまえて考えると、〔Ⅰ〕でも触れたように、ルソーの自然環境認識には、我々のいう「環境」としての意味が含まれつつあることが示唆されよう。

3　ルソーの生物観

(1)　生物種の多様性と植物の通有性の魅力

①　生物種の多様性の魅力感

想像してみてください。あまたの驚くべき光景の多様さ、偉大さ、美しさを。自分のまわりにまったく新しい物たち、不思議な鳥、変わった見知らぬ植物ばかりを見、いわばもう一つの自然を観察し、新しい世界のなかにいるという喜びも。……その魅力は空気が微細なためにいやますのです。」(松本勤訳「新エロイーズ」(上)第一部書簡23,『ルソー全集』第9巻，白水社，1988年第四刷，77頁)

②　植物の種ごとの通有性存在の驚異感

植物の構造や組織について、その繁殖器官の営み――その系統はそのころのわたしにはまったく珍しいものに思われたのだ――について行なう観察の一つ一つに覚える恍惚と陶酔、それは他にくらべるものもないくらいに異常なものだった。それまでは思いも及ばなかった植物の通有性（caractéres génériques）[12]をみわけ、ありふれた種にそれを検証することは、わたしを驚喜させ、さらに珍奇な種にめぐりあう期待をいだかせた。(『夢想』第5の散歩　P.83)

「ディープ・エコロジー」では、人間以外の多種多様な生命の尊重をうたっているが、現在の地球規模の環境政策の一つとして、生物種の多様性を次の世代に引き継ぐことが重視されている。ルソーは、①でみるように、地上の生物種がいかに多様であるか、またそれがどんなに「偉大さ、美しさ」に輝いているかをあざやかに感じ取り、我々に伝えている。

また②では、とくにルソーが好んだ植物学の知識の一端が示されている。ここでは、生物種は多様であるばかりでなく、種ごとに通有性を持つことを植物を例に観察し、「驚異」を感じてい

る様子が見られる。ルソー研究ですでに指摘されている通り、とくに晩年に近づくにつれて、ルソーの知性と感性は植物に向かって大きく開かれた。②で引用した文章からは、ルソーは、すでに前記１の(4)で見たように、自然生物の一つである植物は、独自の生命価値を持つこと、人間が注目しようとしまいと、自らの尊厳と美しさ、輝きと魅力を自己実現していることを感知していることがうかがわれよう。

(2) 動物の権利等の認識

① 人間によって無用に虐待されない権利の主張

動物もその授かっている感性によって、ある程度われわれの自然にかかわりがあるのだから、彼らもまた自然法に加わるはずであり、そして人間は彼らに対してなんらかの種類の義務を負うている、と判断されるだろう。……この特質は動物と人間とに共通であるから、これが少くとも前者が後者によって無用に虐待されないという権利を前者に与えているはずである。(『不平等論』P.31～32)

② 動物における感覚、憐れみの感情、観念の存在の指摘

どんな動物も、感覚をもっているのだから、観念をもっている。動物はある程度までその観念を組み合せさえする。そして人間はこの点では禽獣と量の上で違いがあるにすぎない。……

③ 私は憐れみの情のことを言っているのであるが、……それは…時には禽獣でさえもそのいちじるしい徴候を示すほど自然的な徳である。……馬が生きたからだを足で踏むのを嫌うことは毎日観察されている。動物は同じ種のものの屍体のそばを通るときには必ず不安を感じる。なかには一種の埋葬を行なうものさえもある。そして屠殺場へはいってゆく家畜の悲しげな唸り声は、彼がその心を打った恐ろしい光景から受ける印象を告げ知らせる。(『不平等論』P.52, P.71～72)

まず①では、動物が人間によって不当に虐待されない権利を持つこと、そして②と③では、動物にも、感覚とルソーが重視した憐れみの感情を、そして観念の存在を認めている。①の動物の権利問題には、そもそもいかなる基準で生命をカテゴライズするかという根本的な問題が含まれており、この点については、環境倫理学の分野で現在活発な「動物解放論争」がつづけられている[13]。

なお、ある研究ではこのような「動物の権利の原型を生み出したのは功利主義であり、育てたのはフランス革命であった。この系図が示すように、これらの権利は、動物が痛みを感じる能力に由来していた」としている[14]。この考え方によれば、ルソーはその動物観においてもフランス革命にかかわったことにもなろうか。

またルソーは、動植物には興味を示したが鉱物については、「鉱物界は…人を惹きつけるようなものはなにもない」(『夢想』P.116) と述べている。この点について多田道太郎は,「無機的なものはかれの感覚にはうとましいものであった。」[15]との解釈を示している。

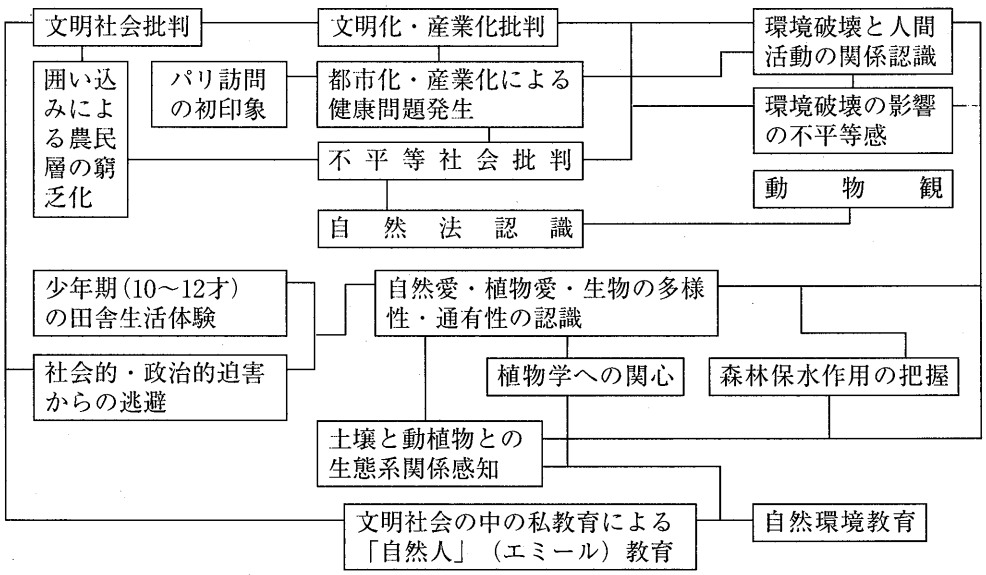
〔Ⅳ〕 ルソーの「環境思想」の背景

以上、私見にかかわるルソーの「環境思想」を示唆してみた。次にこの背景についても検討を加えてみたいところである。しかし、この問題は、ルソーの多様かつ複雑な思想全体と「環境思想」の位置・構造との関係にかかわる大きな問題であり、到底この小稿の残された紙幅が扱い得

るところではない。

そこで、ここではとりあえず、この点についての今後の研究のためのメモランダムの一つとして、小稿で引用したルソーの言説の相互関連を、著作における文脈から整理してみると、一つの仮説として図１が得られたことを報告するにとどめたい。

図１　「環境思想」を持ち得たルソーの背景（仮説）



即ち、図１の上半分に示した通り、本文〔Ⅰ〕の環境問題意識に関するところは、ルソーの社会思想の特徴の一つである文明社会批判、都市化・産業化批判、不平等社会批判とかかわっていよう。これにはまたルソー自身が親しく知っていたとされる、囲い込みによる農民層の窮乏化や、パリ初訪問の印象などの体験も影響したことであろう。また動物の権利観には『不平等論』序文にある通り、自然法認識から由来する、感性的存在として人間と動物は共通であるとの考え方が働いていよう。

また、〔Ⅱ〕の自然についての生態系認識や〔Ⅲ〕の環境倫理的理解に関する部分は、図１の下半分に示した。即ち、文明社会批判に対する社会的・政治的迫害からの逃避欲求は、少年期の田園生活体験[16]とともに、自然愛、植物愛、博物学への関心を育て、それらが生物種の多様性・通有性を認識させるに至ったものと思われる。またこれらは、生態系の存在や森林の保水作用の感知に通じたことでもあろう。

なお、『エミール』に見られるルソーの自然環境教育観は、それが文明社会批判に基づく、「自然人」教育の一環として位置づけられていること、またルソーの自然宗教観が彼のもう一つの「自然」である、万物の秩序[17]、宇宙、神と人間とのかかわりを中心とすることから、エミールへの自然宗教教育には、今日の環境倫理教育（生態圏秩序における人間の位置、倫理の教育）の発想とも似た点が認められることなどに、ルソーが『エミール』で我々に伝えようとしたメッセージの一つを感じ取ることができる。この点も、改めてくわしく触れてみたいところである。

結び

従来、「現代のエコロジー論者は啓蒙思想の価値観に対する批判を広めてきた」[18]とされるなど現在、環境思想研究の側では啓蒙思想を一本化してとらえ、わりに少数の研究者をのぞいて、ルソーにおける一連の言説に十分といえる注意を払わなかったうらみがある。小稿ではこの点をややくわしく扱い、ルソーの「自然」理解の一つに「環境」としての理解が含まれつつあること、少なくとも18世紀フランス啓蒙思想は、その中に環境思想を抱きつつあったことを示唆しようと試みた。もとより小稿は、いわば序論的接近であり、多くの誤解を含んでいることも予想できる。これらは今後の継続的な検討によって克服していくべき問題と考える。

今後の検討課題のもう一つが、同時代の啓蒙思想家との対比で、「自然との対立的関係を深めていく構造をもっていた」[19]との解釈もある、A.スミスの社会・自然認識との比較や、百科全書派（ディドロ、ダランベールなど）の自然観との対比[20]、さらには、唯物論派（ドルバックなど）やフランスの経済思想家（ケネー、テュルゴーなど）の経済・社会思想等との比較などが考えられる。これらの作業を通じて、ルソーの「環境思想」の特質と構造をいっそう明確にすることを志向したい。18世紀啓蒙思想の中には、我々が近代化をスタートさせて以来、いつのまにか振り落してきたものが、まだこのほかにも見出されるかもしれない。

注

(1) レヴィ＝ストロース著・塙嘉彦訳「人類学の創始者ルソー」山口昌男編集・解説『未開と文明』平凡社、1969年、57頁、59頁。

(2) この小稿ではとくに断わらない限り、「自然」を自然環境の意味に用いている。

(3) 平岡昇「ルソーの「自然状態」についての試論」『思想』No.567、岩波書店、1971年、34頁、35頁。

(4) 宮本憲一『環境と開発』岩波書店、1992年、17頁～18頁。

(5) この箇所は、栃木亨が「人本主義哲学における自然の概念（Ⅳ）—ルソーの場合(2)—」『姫路短期大学研究報告』No.22、1977年の５頁で、ルソーの社会悪の描写について現代社会との対比を明らかにするための「短注」として取り上げたことがある。

(6) 小林善彦「自由についての二つの考え方（下）—とくにルソーをめぐって—」『思想』No.565、岩波書店、1971年、112頁。

(7) 池田善昭「４　環境問題はわれらに何を語りかけているか」伊東俊太郎編集『講座　文明と環境』第14巻、朝倉書店、1996年、78頁～80頁。

(8) 加藤尚武「１．環境倫理学の成立」伊東俊太郎編集『講座　文明と環境』第14巻、朝倉書店、1996年、12頁。

(9) 開龍美「第２章　ディープ・エコロジー」中村友太郎ほか編著『環境倫理』北樹出版、1996年、34頁。

(10) 宮本憲一『環境経済学』岩波書店、1989年、106頁、107頁。

(11) 海野道郎「第２章　環境破壊の社会的メカニズム」飯島伸子編『環境社会学』有斐閣、1993年48頁、49頁。

(12) J.-J. Rousseau ; *Œuvres complètes* I, Pléiade, nrf, gallimard, 1959年、1043頁（以下 OC）。小稿では、ルソーの引用訳文について、原文を本 全集で参照した。この「générique」には「普遍的な」という意味のほか、「属としての」という意味もある。小学館ロベール仏和大辞典編集

委員会編『ロベール仏和大辞典』小学館、1988年初版第1刷，1134頁。

⒀ 鬼頭秀一『自然保護を問いなおす』筑摩書房、1996年、63頁。

⒁ ジェイムズ・ターナー著・斎藤九一訳『動物への配慮―ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』法政大学出版局、1995年、229頁。

⒂ 多田道太郎「11『孤独な散歩者の夢想』について」桑原武夫編『ルソー論集』岩波書店、1970年、377頁。

⒃ 『告白』には、ボセーの村の2年間では「田園はわたしには目新しく……田園を愛する気持はたいへん強く、これは終生消えなかった。」(『告白』上、22頁）とある。なお、栃木亨「人文主義哲学における自然の概念（Ⅲ）―ルソーの場合―」『姫路短期大学研究報告』No.22、1977年、参照。

⒄ 例えば『エミール』には、次のような記述がある。

① 人類は万物の秩序（l'ordre des choses）のうちにその地位を占めている。(『エミール 上』第2編、P.103）OC, tome Ⅳ、303頁。

② ああ、人間よ、きみの存在をきみの内部にとじこめるのだ。そうすればきみは不幸ではなくなるだろう。自然が万物の鎖のなかできみにあたえている地位にとどまるのだ。……きみの自由、きみの能力は、きみの自然の力の限度において発揮されるもので、それ以上におよぶものではない。(『エミール 上』第2編、P.111)

⒅ 小原秀雄監修『環境思想の出現』東海大学出版会、1995年、22頁。

⒆ 藤原保信『自然観の構造と環境倫理学』御茶の水書房、1991年、107頁。

⒇ この点については、舟橋豊「ルソーとディドロにおける自然の観念(1)～(5)」『名古屋大学教養部紀要』第22、23集、1978年、1979年、『名古屋大学総合言語センター言語文化論集』Ⅱ―2、Ⅲ―2、Ⅳ―2、1981年、1982年、など参照。

〔備考〕本稿は、日本教育学会第55回大会（1996年8月29日）での発表内容を、より展開しようとしたものである。なおこの発表では、拙稿「フランス革命をめぐる諸研究の新展開と国際理解教育―ルソーの環境思想との関連を含め、示唆を試みる―」『文教大学教育研究所紀要』第3号（1994年）の内容を進展させようとした。 (1997年6月19日)

(国際学部教授)